

## 第 64 回大会発表タイトル・要旨

統一テーマ 「ロマンス諸語の語用論」

### 1) 「現代のスペイン語学の動向について」

神戸市外国語大学 福嶋 教隆

(要旨)

昨今、スペイン語圏では、スペイン語学の成果が活発に公開されている。本発表では、その動向の一端を次の2つの視点から概観する。

(1) スペイン王立学士院 (Real Academia Española) 及びスペイン語学士院連盟 (Asociación de Academias de la Lengua Española) の活動に注目する。これらの研究機関は、2025年、『スペイン語新文法』 (Nueva gramática de la lengua española) の改訂版を出版し、今年11月には『スペイン語辞典』 (Diccionario de la lengua española) の第24版の刊行を予定するなど、精力的に活動している。

(2) スペインの言語学者 故Manuel Leonetti (†2022) と、その研究グループの活動に注目する。その成果が集約されたLeonetti 追悼論文集『ことばの海のダイビング』 (Buceando entre palabras, 2024, Silvia Gumiel et al. (coords.), Univ. de Alcalá) には、現代のスペイン語学研究者が選択するテーマや、拠って立つ分析手法の傾向が現れている。

### 2) 「*siempre que* の通時的変遷：統語的定型化と語用論的機能」

愛知県立大学 長 由佳

(要旨)

本研究は、13世紀から21世紀に至るスペイン語の接続詞句 *siempre que* の変遷を、歴史コーパス (CORDE) および現代コーパス (CORPES XXI) に基づき分析するものである。本句がいかにして時間的な副詞句から、特定のジャンルにおいて戦略的な「条件提示」を確立し、現代の談話マーカールとしての定型化 (fijación) を遂げたのか、そのプロセスと語用論的動機を明らかにする。

13世紀から14世紀にかけての中世初期資料では、法典等に見られる「規定された義務の反復 (～する時はいつも)」という時間的同時性の用法が支配的であった。この時期は主節の後に置かれる後置用法が定型であり、語用論的には確定したルールに対する「客観的なスケジュール補足」として機能していた。

大きな転換点を迎えるのは15世紀から17世紀の黄金世紀である。演劇の対話等

において、結論の前にまず前提条件を承諾させる「限定的条件(～である限り)」の用法へと進化し、文頭に置く前置用法が定型化した。これは話し手が先に主導権を握る「対話コントロール」を目的とした、極めて戦略的な形式の確立であったと言える。

18世紀から20世紀にかけては、科学的記述における「一般的法則の提示(前置)」と、日常的な「但し書き(後置)」の使い分けが定着し、配置の選択そのものが情報の重要度や話し手の態度を調整する機能を担うようになった。

21世紀においてデジタル媒体が広がりとともに、*siempre que sea posible* (可能な限り)に代表される、断定を避けるための定型表現が広く浸透している。これは単なる物理的条件ではなく、自身の発言の絶対性を和らげる「ヘッジ(生け垣)」として機能する。不特定多数との摩擦を回避し、発話責任を柔軟に調整する「現代的な対人配慮(ポライトネス戦略)」の手段として、新たな談話マーカ一の形が一般化している。

こうした変遷は、客観的な事象の記述から、話し手による対話の制御、さらには現代的な対人摩擦の回避へと、言語使用者の関心が移行してきた軌跡を浮き彫りにしている。13世紀から21世紀に至る配置の定型化の歴史は、言語がコミュニケーション媒体の変容や社会的な要請に適応しながら、対人関係を調整するための高度な語用論的機能を分化・発展させてきたプロセスであると考えられる。このように、*siempre que* の歴史的変遷は、言語が単なる伝達手段を超え、対人関係を構築する戦略的な道具へと洗練されてきた過程を如実に物語っているのではないだろうか。

### 3) ドロミテ・ラディン語バディーア変種の非平叙文における「希求性」と心態詞

東京外国語大学 土肥篤

#### (要旨)

バディーアの谷(Val Badia)で話されるドロミテ・ラディン語では、命令文において動詞を命令法に活用するだけでは文法的な文とならず、いわゆる心態詞の使用が義務的であることが知られている。また一方、疑問文においては心態詞の心態詞の有無が「問い」と「反語」という異なる言語行為の区別と結びついていることが指摘されている。これらの現象は個別に研究・議論の対象となるか、当該変種における心態詞の多用と関連づけて記述されてきた(たとえば、Salvi 2020)。

これに対して本発表では、これらの現象に対して統一的な説明を試みる。その際、非平叙文が表現する命題の「希求性(desirability; cf. Wilson & Sperber

1988)」の概念を導入し、その帰属する先を示す手段として心態詞を位置付ける。

(参考文献)

- Salvi, Giampaolo. 2020. Il ladino e le sue caratteristiche. In Videsott, Paul & Videsott, Ruth & Casalicchio, Jan (eds.), *Manuale di linguistica ladina*. Berlin: de Gruyter.
- Wilson, Deirdre & Sperber, Dan. 1988. Mood and the analysis of non-declarative sentences. In Dancy, Jonathan & Moravcsik, Julius & Taylor, Charles (eds.), *Human agency: Language, duty and value*, 77–101. Stanford: Stanford University Press.

自由テーマ

- 1) Jorge Amado の作品におけるポルトガル語二人称所有形容詞 *teu/seu* の選択要因  
東京大学大学院 鈴木恵理

ブラジル・ポルトガル語では、二人称の所有形容詞として、本来の *teu/tua* 等に代わり現在専ら *seu/sua* 等が使用される。

これは Lucena (2016) によれば、従来の *teu* 系と、加えて二人称に参入した *seu* 系との出現が 1900～1930 年代に拮抗し、以降は *seu* 系が優勢になるという通時的变化が起こった結果とされる。

また Haspelmath (2017) の言語類型の研究によれば、所有表現とともに現れる頻度が高い名詞には譲渡不可能なものが多く、頻度が低い名詞には譲渡可能なものが多いという。両者の説を総合した上で、高頻度の表現は固定化しやすいと想定すると、所有表現を伴う頻度が高い名詞には *teu* 系が用いられ続け、頻度の低い名詞では *seu* 系が取って代わったことが推定される。

本発表では、ブラジル北東部の自然な口語を描いた国民作家 Jorge Amado の、1920～40 年代を舞台とした作品を分析し、この仮説を検証した。その結果、前期の 2 作品では *teu* 系の使用が *seu* 系を上回った一方で、後期の 2 作品では *teu* 系が顕著に減少し、「*seu* 系+譲渡不可能名詞」が増えたことが確認された。

- 2) ポルトガル語の接続法未来を伴う関係詞節の意味に関する試論

— モダリティと定性の接点

大阪大学外国語学部 鳥越 慎太郎

本研究ではポルトガル語の接続法未来を伴う関係詞表現の意味を考察する。Comrie & Holmback (1984) によると、定冠詞を伴う先行詞に続く関係詞節や、先

先行詞を含む関係詞節 (*quem* や *o que*) において接続法未来が用いられる場合、先行詞の総称性を表現する。一方で、武田 (2001) などでは接続法未来を伴う関係詞は条件性を表現するとされる。ポルトガル語の関係詞における叙法の研究においては、前者の先行詞の意味に関するものと比べ、後者のモダリティの視点からの説明は多くなく、本研究ではモダリティの視点から着目しつつ、先行詞の定性との接点を模索していく。

まず、モダリティ研究 (e.g. Palmer 2001, 澤田 2006) や定性研究 (e.g. Hawkins 1978, Lyons 1999)、及び近年のポルトガル語の接続法研究 (e.g. Marques 2013, 2025) における、関係詞表現に対する観点を整理していく。これをもとに、2025年の第 63 回大会における発表でのコーパス分析で得られた *quem* の表現 95 例 (接続法未来 55 例、接続法現在 40 例) と *o que* の表現 82 例 (接続法未来 55 例、接続法現在 40 例) を質的に分析し、先行詞の総称性と、関係詞節の条件性すなわち可能性や真偽判断のモダリティの関わり方を考察して整理していく。

### 3) スペイン語接続法補文における話題化制約再考

広島大学大学院 Errazola Mora Sofia

広島大学 上野貴史

本発表は、スペイン語の接続法補文における話題化構文の制約について、直説法補文との対比に基づき検討する。従来、直説法・接続法の交替は主として意味論的観点から論じられてきたが、統語構造、とりわけ左周辺に関わる制約は十分に整理されていない。本発表では、接語左方転位 (CLLD)、ぶらさがりトピック (Hanging Topic)、および文頭化といった複数の話題化構文を区別し、それぞれの分布を検討する。その結果、接続法補文ではこれらの構文が一律に排除されるのではなく、構文タイプおよび文脈に応じて許容度に差が見られることを示す。さらに、この非対称性を、接続法補文における左周辺構造の縮減という観点から説明し、意味論的要因だけでは捉えきれない統語的制約の存在を指摘する。

### 4) 「スペイン語の母音分立と同じ母音連続を含む日本語の連母音の

発話に対するスペイン語母語話者の主観評価」

亜細亜大学 高澤 美由紀

清泉女子大学 木村 琢也

立教大学 泉水 浩隆

日本語及びスペイン語ともに、母音が連続しながら二重母音を形成しない場合があり、連母音、母音分立と其々称する。このような母音連続は、モーラ拍リズムを有する日本語においても音節拍リズムを有するスペイン語においても、音韻的には母音連続を形成する母音其々が単独でリズム単位を成す。しかし、その

音声的実現では、日本語の連母音を構成する其々の母音が単独でリズム単位を成すのに対し、スペイン語では母音分立を構成する母音連続全体が一つのリズム単位を成す傾向が見られる。一方、スペイン語の語を片仮名表記する際、強勢位置が長音記号で示されることがある。これらの点に着目し、日本語母語話者のスペイン語発音習得の一助とするため、強勢を含む母音分立を持つスペイン語の語の片仮名表記を日本語母語話者が読み上げた音声をもとに、母音連続の部分の持続時間のみを機械的に操作した 64 の刺激を用い、スペイン語母語話者 26 名に対し聴取実験を実施し、刺激が提示された語にどの程度対応していると考えられるかを 5 段階で評価してもらった。その結果、長音記号で示された部分の母音の持続時間を、長音記号なしで示された部分の母音の持続時間と同等になるように短縮した刺激の方が他の刺激より高く評価される傾向が示された。

5) 「コセリウの言語理論が有する意義について—接続法の研究に紐づけて—」

大阪大学大学院 森本 匡紀

(要旨)

本発表では、発表者の取り組むスペイン語ならびにフランス語の接続法の研究を具体的な例として、言語学者 Eugenio Coseriu による言語理論の再評価を試みる。はじめに、Coseriu (1973<sup>3</sup>)において著者が引き合いに出す Bühler (1934)の図式、ならびに著者自身が提唱する言語の存在論的様態の区別をもとに、言語学の種々の方法論がそれぞれ明らかにしうる言語の諸側面について簡潔に考察する。つづいて、López Serena (2019)を参照して、コセリウの言語理論を基盤とする解釈学的方法論を導入し、この言語学的手法が明らかにしうる言語の一側面を提示する。最後に、発表者が森本 (2026)において案出した接続法の使用に関わる認識の様相に関する図式を提示し、当該図式が接続法の意味的働きに関する先行研究との間にもつ連関を、前述のコセリウの言語理論ならびにそこから派生する解釈学的方法論に紐づけて説明する。以上から、言語学における各方法論の相補性に関してコセリウの言語理論が有する意義を示す。

参考文献

Bühler, Karl (1934) *Sprachtheorie : die Darstellungsfunktion der Sprache*, Jena: Gustav Fischer

Coseriu, Eugenio (1973<sup>3</sup>) “Sistema, norma y habla”, en *Teoría del lenguaje y lingüística general. Cinco estudios*. Madrid: Gredos, pp.11-113.

López Serena, Araceli (2019) *La lingüística como ciencia humana Una incursión desde la filosofía de la ciencia*, Madrid: Arco/Libros, S.L.

森本匡紀 (2026) 「スペイン語の接続法に関わる認識の様相について—認識論に

基づく接続法と認識との関連性の考察—」 *Estudios Hispánicos* 50 号, pp. 95-127, 大阪：大阪大学外国語学部スペイン語部会.

- 6) 「フランス語前置詞句 *à l'avance* に関する意味論的考察  
— *d'avance* との比較を通じて—」  
東京大学大学院 小金井 菜々葉

(要旨)

本発表は、フランス語の前置詞句 *à l'avance* の意味機能を、*d'avance* との差異を中心に記述することを目的とする。

フランス語において名詞 *avance* が使用される前置詞句表現は、*à l'avance*、*d'avance*、*en avance*、*par avance* の 4 つである。そのうち、*à l'avance* と *en avance* に関しては統語論的、意味論的観点からの差異に注目が集まる一方、*à l'avance* と *d'avance*、*par avance* は同義表現であると考えられてきた (cf. Grevisse et Goose 2016)。特に、*à l'avance* と *d'avance* については、共起可能な動詞が異なることが観察されているものの (cf. Bottineau et Do-Hurinville 2015, Saunier 2016)、その差異がこれまで十分に記述されてきたとは言い難い。

本発表では、*à l'avance* の用例を分析することを通して、この前置詞句に固有の意味構造を明らかにする。とりわけ *à l'avance* と *d'avance* が交替不可能な例に着目し、*à l'avance* と *d'avance* には「基準時点 (*repère temporel de référence*)」の性質に違いがあることを示す。また、*à l'avance* と *d'avance* の基準時点の性質の差異には、冠詞の有無が関与していることに言及する。*à l'avance* における定冠詞は、音韻衝突を避けるためだけにとどまらず、意味論的役割を担っている可能性があることを指摘する。

- 7) 「フランス大統領の新年演説における選択的リエゾンおよび連続なしリエゾン  
— ドゴール大統領からマクロン大統領までの 75 年間におけるリエゾンの変遷—」  
大阪大学 バルカ・コランタン

(要旨)

リエゾンは、フランス語における代表的な音韻変異の一つであり、古くから盛んに研究されてきた現象である。しかしながら、極めてフォーマルなフランス語を対象としたリエゾンの研究は、近年では多いとは言い難い。1980 年代には、Pierre Encrevé が政治家の演説やインタビューを対象とした重要な研究を行い、フォーマルなフランス語に特有の現象として「*liaison non enchaînée*」(連続なしリエゾン) の存在を指摘し、その分析に焦点を当てた。しかし、Encrevé の研究以降約 50 年が経過した現在において、フォーマルなフランス語におけるリエゾンの実態がどのように変化してきたのかについては、いまだ十分には解明されていない。フランスでは 1961 年以降、毎年大統領が「*Vœux aux Français*」と呼

ばれる新年演説を行っている。この演説は毎年同じ状況で実施されるため、比較に適した資料であると考え、ドゴール大統領(1961年)からマクロン大統領(2026年)に至るまでの演説を文字化し、コーパスを構築した。このコーパスを用いて、歴代大統領における選択的リエゾンおよび *liaison non enchaînée* の実現を比較し、顕著な共通点および相違点を明らかにすることを目的とする。

## 8) 「スルセルヴァ方言における音素 /c/ の音響特徴について」

東京外国語大学特別研究員 清宮貴雅

本研究は、現代ロマンシュ語スルセルヴァ方言における音素 /c/ の音響特徴を明らかにすることを目的とする。/c/ の調音位置については一定の見解がある一方、調音方法については破裂音と破擦音のいずれとみなすか議論が分かれている (Haiman & Benincà 1992; Liver 1991, 2010; Spescha 1989)。また、ヴァラーデル方言を対象とした Schmid & Negrinelli (2015) は、音素 /c/ と /tʃ/ の音響的差異がほとんど認められないことを示しているが、スルセルヴァ方言に関する体系的な音響分析は管見の限り報告されていない。本研究では *AIS, reloaded* の音声データを用い、/c/ を破裂音 /k/ および破擦音 /tʃ/ と比較することで、その調音方法および音響的特性を検討する。まず VOT の比較により /c/ の調音方法の位置づけを行い、その後、/c/ と /tʃ/ の摩擦成分のスペクトル包絡を抽出し、統計的検定により両音の分布の異同を分析し、先行研究との比較を行う。

### 参考文献

- Haiman, John & Paola Benincà (1992). *The Rhaeto-Romance languages*. London: Routledge.
- Liver, Ricarda (1991). *Manuel pratique du romanche, sursilvan – vallader : précis de grammaire d'un choix de textes*. Chur: Ediziuin Lia Rumantscha.
- Liver, Ricarda (2010). *Rätoromanisch : Eine Einführung in das Bündnerromanische 2. Auflage*. Tübingen: Narr.
- Michele Loporcaro, Stephan Schmid, Diego Pescarini, Graziano Tisato, Giulia Donzelli, Lisa Gasner, Alice Idone, Stefano Negrinelli, Adriano Salvi, & Chiara Zanini (2022). *AIS, reloaded* (AISr). University of Zurich. <https://www.ais-reloaded.uzh.ch/>
- Spescha, Arnold (1989). *Grammatica sursilvana*. Cuir: Casa editura per mieds d'instrucziun.
- Schmid, Stephan & Stefano Negrinelli (2015). "Palatal obstruents in two rhaeto-romance varieties: Acoustic analysis of a sound change in progress". In *Proceedings of the 18th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS 2015)*.

9) 「ロマンス語条件法はどのような意味を持つのか、条件法研究の比較」  
東京大学大学院 川瀬 瑛美

(要旨)

条件法は、多くのロマンス諸語に共通して、「過去からみた未来」という時制用法と、「反実仮想」「語調緩和」「伝聞」等のモダリティ用法がみとめられる動詞形態である。さらに、俗ラテン語の時代にはなかったため、俗ラテン語から各ロマンス諸語への発展を象徴する動詞形態とも言え、歴史言語学的な観点からの研究や記述が豊かである(Allières 2001, Alkire & Rosen 2010, Ledgeway 2012)。しかし、それら先行研究は、形態の歴史的変化を記述したものや、それをロマンス諸語間で比較した研究にとどまる。条件法の成り立ちとかかわりの深い未来時制であれば、文法化研究の分野において、形態と意味を同時に扱った研究があるが (Fleischman 1982, Bybee 2015, Lehmann 2015)、条件法の意味については、ロマンス諸語全般を比較した研究や整理は案外すすんでいない。本発表は、このような問題に取り組む一歩として、条件法研究が盛んなフランス語 (林田 1982)と、条件法がモダリティ用法しか持たないルーマニア語 (Timoc-Bardy 2013)をはじめとし、各ロマンス諸語において条件法の意味がどのように個別に研究されてきたかをまとめ、ロマンス語条件法が持つ意味のおおまかな枠を捉える。

参考文献

- Alkire, T., & Rosen, C. (2010). *Romance languages: A historical introduction*. Cambridge University Press.
- Allières, J. (2001). *Manuel De Linguistique Romane*. H. Champion. Paris.
- Bybee (2015) *Language Change*, Cambridge University Press, 小川芳樹他訳『言語はどのように変化するのか』2019, 開拓者.
- 林田遼右 (1982) 「条件法の諸問題」『千葉大学人文研究』11, 69-85.
- Ledgeway, A. (2012). *From Latin to Romance: Morphosyntactic typology and change* (Vol. 1). Oxford Studies in Diachronic a.
- Fleischman (1982). *The future in thought and language : diachronic evidence from Romance* Cambridge studies in linguistics ; 36.
- Lehmann, C. (2015). *Thoughts on grammaticalization*. 3rd edition (Classics in Linguistics 1). Berlin: Language Science Press.
- Timoc-Bardy, R. (2013) « Le roumain : « une langue sans concordance des temps » ? », *Langages*, 191, pp.53-66.